

# 卷頭言

## スキヤンダル!!

田畑光永

不謹慎な言い方だが、今や世界はスキヤンダルの花盛りである。昨年来のわが国のニュースは総会屋の巨額利得とそれに絡む証券・銀行不祥事、自称石油商の大規模献金・接待、道路公団理事の接待収賄、大蔵省の銀行検査官の接待収賄、代議士の証券不正取引疑惑と本人の自殺などに占領されてきた。代議士のほかにも自殺者が出た。

太平洋を隔てた隣国では、大統領が年若い女性との「親密な関係」について、当の相手に偽証を強要したのではないかと疑惑が浮上し、一時は大統領の椅子を失いかねないとさえ囁かれた。

反対隣りの中国では、共産党の一党独裁の長年の澱おちがたまりにたまって、今や腐敗汚職それ自体は珍しくもなんともないばかりか、事あるごとに、最高首脳が「このままでは腐敗で国がつぶれてしまう」と悲鳴とも怒声ともつかぬ声を張り上げている。

ヨーロッパの国々でも、イタリアの前首相をはじめスキヤンダルの主人公を演じている政治家や高級官僚にはこと欠かない。

一体、この「花盛り」現象には共通の原因のようなものがあるのだろうか。おそらくあるのだと思う。しかし、それを究明するには、社会主義とか資本主義といった経済体制の区別や民主主義と一党独裁という政治体制の違い、生活水準の高低、宗教や道徳と個人とのかわり合いなどなど、恐ろしく範囲の広い問題をすべて包み込んで考えなければならぬので、とても私の手に負えない。ここではありきたりだが、「世紀末」の現象ということに一応しておこう。

ただ、同じ世紀末のしからしむるところにしても、国によってだいたい色合いを異にする。それを眺めてみたい。まず、アメリカ。法律上の争点はいくまで大統領が偽証を強要したかどうかである。個人の自由は大統領といえど

も侵害してはならないという大義名分が攻撃側の武器である。とはいえ、ことがセックス・スキャンダルでなかったら、同じ偽証強要でもあれほどの大騒ぎになったかどうか。人間の関心や興味には、事柄によつて強弱があるのはしかたのないところだろう。しかし、私が注目したのは大統領とPLOのアラファト議長との会談の後の両者の共同記者会見の席で、質問がもっぱらスキャンダルのほうに集中したり、大統領のほうも夫婦で何度もテレビ・カメラの前で「彼女とは性的関係はない」と明確な言葉を使って答えていたことである。

日本でも首相の女性関係が問題になったことが、私の見聞した限りで二回あった。田中角栄首相と宇野宗祐首相である。田中首相の場合、国会の委員会でも野党議員が首相の愛人について質問したのに対して、首相はいやいやと言うように顔の前で右手を振っただけで、答弁に立たなかった。また、宇野首相は愛人問題が選挙敗北の原因ではないかと記者に問われた時、「すべて私の不徳のいたすところです」と答えただけであった。いずれの場合もそれですんでしまった。この種の質問にははつきりと答えなくてもいい、という社会的な了解が成立しているからであろう。

この違いはじつは大きい。アメリカには「二〇ドル規制」というのがあって、公職にある者はそれ以上高額の接待や贈り物を受けてはならないそうである。明確な線引きである。日本では接待や贈り物となると、よく「社会通念」という言葉を持ち出して、許されるとか許されないという話になる。犯罪かそうでないかの区切りが曖昧である。愛人問題に言葉を濁すのを許すことが、こちらの曖昧さにもつながるのではないか。

中国における腐敗汚職はまた一味も二味も違う。中国の歴史は専制王朝の興亡の歴史だが、その興亡の契機は腐敗である。ある王朝が腐敗して、国を統治せよという「天命」に應えられなくなった時、別の力が出現して「天命」を「革」す（あらため）る。つまり「革命」が起きる。だから、中国においては腐敗はあつてはならない異常な出来事というより、むしろ歴史を動かす原動力である。治療で治る病気ではなくて、癌のごとく増殖し、やがては命取りになる。出来ることは、その増殖のスピードを抑えることだけである。

今の政権も対抗勢力の存在を許さないという点では、昔の専制王朝と変わらないから、腐敗の程度は政権の余命の函数である。それがこのところますますひどくなって来た。検事総長が国会にあたる人民代表大会に報告した数字では、九三年から九七年までの五年間に贈収賄など汚職事件の被告人は十八万人以上、そのうち共産党と政府の官僚で処分を受けた者は四万人以上となっている。

全体の数字もさることながら、首都北京市の上層部の汚職摘発が九五年以来三年ごしで進んでいて、副市長の一人は自殺し、他の幹部もあらかた更迭された。この摘発自体は江沢民総書記の威信をある程度高め、彼自身の党内基盤の強化にはつながったのだが、実態が明るみに出るにつれて、たんに北京市の問題に止まらず、共産党政権全体の体質が暴露されてしまい、政府を慌てさせている。この北京市の腐敗を題材にした「天怒」という実録小説が去年出版され、ベストセラーとなって大いに読まれたのだが、今言ったような事情から、政府はそれを発禁にしまった。しかし、庶民は歴史の経験を反芻しながら、政権のそういう狼狽ぶりを、憤慨するというより、突き放して眺めているように見える。それはそれで権力者にとっては冷や汗の出る毎日であろう。

さて、日本である。冒頭に並べたように、スキヤンドルの多品種生産中である。よくもまあ、あっちでもこっちでも出て来たものである。ところが、騒いだわりにすつきりした感じがしない。それどころか、どの件も表に出て来たのはほんの一部にすぎないと誰もがわがっている。企業と総会屋との腐れ縁などいくらでもあるはずだし、多数の公社公団の理事の内、悪いのは道路公団の某一人のみとは信じられない。自殺した自民党代議士のご母堂は「みんな同じことをしているのに！」とマスコミに喰ってかかっていた。

大蔵省の銀行検査官二人が逮捕された時、政府はすわ一大事とばかりに大蔵大臣を交代させた。しかし、この二人の接待収賄など（もし現金などを受け取っていないければ）単価にすれば、キャリアといわれる高級官僚への接待とは比べものにならないことは、去年十一月、多額献金疑惑で国会に証人喚問された自称石油商・泉井純一の証言で明らかなのである。そう、この泉井なる人物の行動こそもつと徹底的に究明すべきなのだ。この男は三井と三菱の間で石油を転売して、数十億の利益を上げたことになっており、それで政・官界に献金・接待をしまくり、自分は脱税容疑で被告の身となっているのだが、おそらくは政・官・財の間の金品の運び屋であろう。しかし、銀行検査の日時を聞き出すといったような低次元！の目的の接待ではなかったから、この男との関連では逮捕者などは出ていない。接待に与かった高級官僚はご注意を受けただけ、泉井本人に対する国会の追求も当然ながら甚だ及び腰である。さる二月二十日、政府が発表した平成五年以降の中央官庁の不祥事で、処分を受けた課長以上の官僚は監督責任を問われた者を含めて、延べたつたの四十九人である。スキヤンドルにとっての「温床」とはこういう風土を言うのかも・・・。

（たばた・みつなが／経営学部教授）